

三浦半島における向井一族の遺跡

高橋 恭一*

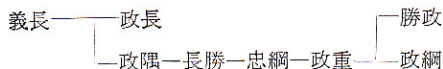
Relics of the Mukai Tribe on the Miura Peninsula

Kyoichi TAKAHASHI

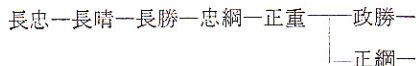
三浦半島は江戸にとってあらゆる点で重要な地理的条件を備えていることは今更申す迄もない。徳川家康の江戸開府以来三浦半島が江戸に対しての重要性を物語る歴史的事実は全く枚挙にいとまもない。その一つ特に江戸防衛の点からの位置は高く評価されている。その江戸防衛の重責を荷った人に向井一族がある。これら一族の史跡もまた今日各所に残っている。それら残された史跡を通して向井氏を解明して行きたいと思う。

1. 序 論

向井氏は、寛永系図に仁木三郎義任の後胤が伊勢の国田丸のむかひに居住していたので向井と号したとか、仁木尾張守長宗が伊賀国の向井の庄に住んでいたので家号としたとかいう説がある。いや伊賀の国には向井の庄はなく恐らく伊勢国度合郡の向井の庄の誤りではないか^(註1)などという。また、紀伊国北牟婁郡向井より起るかともある^(註2)。しかし、「もと北畠家臣にて仁木義長の孫政隅始めて向井氏と称し……」^(註3)とか、野史にも「仁木義長孫政隅。称族向井」とある。また、三浦古尋録に「北条ノ城跡ノ下岩窟ニ向井家ノ碑銘有」とあり、その銘の中にも「仁木右京大夫義長五代孫修理大夫政長之伯父源氏向井式部大輔政隅」と政隅が向井を姓としているし、長井町に残る向井氏系図にも碑銘と同じように記される。これらを見れば恐らく政隅から向井を姓としたのであろうことがわかる。ところが寛政重修諸家譜には政隅は出ていない。したがって左のようになる。(向井氏系図・野史・碑銘等に拠る)。



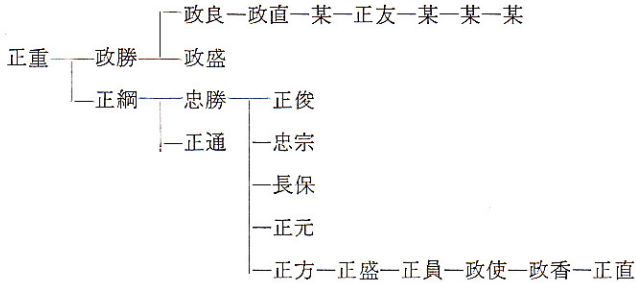
しかるに、寛政重修諸家譜では前記のように政隅がなくこのようになっている。



しかし、正重(政重)以前は三浦半島に直接関係がないので正綱(政綱)以後に問題をしばらく他は後日に譲りたい。

正重以後を諸家譜に拠れば次のようにみることができる。

* 横須賀市史編纂室
 註 1. 寛政重修諸家譜
 註 2. 姓氏家系辞典
 註 3. 同 右



この系図のうち正重の子政勝の系統の遺跡が走水にあり、正綱およびその子孫の遺跡が三崎を始め大津や逗子市沼間などにある。

正(政)重は初めは北畠家の家臣であったが後に武田家に仕えて水軍の将をつとめておった^(註4)。天正七年から頻りに徳川氏の兵を拒いたが駿河国安倍郡用宗の持舟城で遂に長男伊兵エ政勝と共に牧野康成らに攻められ戦死した。持舟城址に残る寛文五年に建てられた碑に依れば天正七年向井伊賀守が持舟城を守って戦死した由を銘録されている^(註5)。その時、正重の次男正(政)綱は清水港に居り武田勢の船手大将をしていた。天正十年武田勝頼滅亡の悲運に遭った正綱は主を失い処士となったが、翌十一年に徳川家康はこの正綱を御家人とすることを本多作左エ門重次を通して伝え、ここで家康の麾下に属し食禄二百俵を頂戴しいよいよ徳川家家臣になったわけである。

2. 三崎の遺跡

まず三崎町の二町谷にある臨濟宗の紫陽山見桃寺を挙げたい。

この寺は昔源頼朝の山荘の一つであった桃の御所の古地で向井兵庫頭正綱が開基となっている^(註6)。したがって同寺に東帯姿の正綱像およびその子忠勝の長上下姿の木像が安置されている。また、墓地には八基の向井一族の巨大な墓碑がある。向って左にあるのが政綱の墓で見桃寺殿天慶玄龍居士とあり側面に寛永元甲子三月二十六日と刻されている。しかし寛政重修譜には法名を元龍とあり、寛永譜には天溪玄立とあり没年を寛永二年としている。年齢の六十九才は両譜とも同じである。

二番目の墓には瑞龍院殿雲台道祥□□・天球院殿繁室寿昌□□と二行に並び右側に寛政六甲寅四月朔□□、左側に向井将監源政香有謂□□とある。三番目は向井将監母桃室周恩禅定尼とある大きなもの、四番目が向井左近将監忠勝の墓となっている。しかし、忠勝の墓は、寛政譜には東叡山の本覚院に葬ると見える。その法名は陽岳寺殿天海玄祐居士とあるが兵祐とか宗心とかともある。没年は寛永十八年十月十四日で年六十才であった。五番目は比較的小さい宝篋印塔で銘文は明らかでない。

六番目は崇安禅心居士とあり、これは忠勝の二男に当る忠宗(直宗ともある)の墓で正保元年六月十七日年三十八才で死去、この寺に葬ったものである。忠宗は寛永十八年十二月四日父忠勝の跡を継ぎ弟の正方にも忠勝の知行五千石の内千石をわかち与え、父のあずかっていた船および水主らを全面的に引継いでいた。彼の妻は伊奈備前守忠次の女である。

七番目は五番目のもの同様な宝篋印塔で矢張り銘文ははっきりしていない。同列最右の八番目も大きなもので寿陽周仙禅定尼と彫され没年も左右に分けて寛永十五寅十月十日とある。

以上のように政綱・忠勝・忠宗三代の墓があり、その外に婦人らの墓もあるわけである。

註 4. 姓氏家系辞典
 註 5. 日本地名辞典
 註 6. 相模風土記

なお、政綱の屋敷は現在の浄土真宗の泰山山最福寺の寺域で、風土記の最福寺の項に「此地向井兵庫頭政綱屋舗跡ニテ船玉八幡ノ社地ナリ。彼社ハ政綱ニ預ケラレシ泰平丸ノ船玉ヲ祀レルナリ。故ニ当寺此所ニ移リシ時泰平山ト改ムト云フ」とある。もっとも同寺の山号は海岸山であったという。忠勝の屋敷はここでなく皇国地誌に「東北の方陣屋山ニアリ、天正年間北条氏規居館タリ、其ノ後慶長年間徳川氏旗下向井忠勝之ニ在リ後海関奉行邸宅トナル」とあるように宝蔵山の下にその居宅があったらしい。また忠勝関係のものに海南神社の御手洗池に架してある神橋がありその擬宝珠の銘に「相州三浦郡三崎郷海南宮神前橋向井左近将監忠勝身宮安泰寿命遠大祈念之故造焉寛永十七年庚辰九月吉日」とあるが、これによってこの神前橋を忠勝が寄進したことがわかる。なお、この橋は江戸御大工椎名兵庫の作であったことがその銘文によって明らかである。

次に向井氏の古碑なるものが三崎にあった。浦賀奉行の小笠原長保の甲申旅日記に「一の窟に向井氏の古碑あり」と見えているがその碑の行方は今日まで判明していない。三崎志にも墳墓の条に「向井左近将監忠勝之碑宝蔵山ニアリ」とある。三浦郡誌はこの碑文について「海宝院境内向井氏墓誌及貞昌寺内向井氏墓誌に照合するに、忠勝の卑系に稍疑問を存すれども、参考の為左に掲げん」として

慶長二十年乙卯大阪御帰陣之節、從征夷大將軍秀忠公此処向井左近將監忠勝拝領矣。寛永十年癸酉從征夷大將軍家光公日本一之大安宅御船、向井左近將監忠勝承之、好而為作、既成就矣。大將軍彼御船被為成、天下諸大名有供奉其時号日本丸、伊勢之國主仁木右京大夫義長五代之孫修理大夫政長之伯父源氏向井式部大輔政隅紀伊國於田辺三十八歳而死、武勇之譽有之、式部大輔嫡男向井治部少輔長勝伊勢於田丸碁之場助言仁碁相手兩人指害、四十三而切腹、治部少輔嫡男向井刑部大輔忠勝於勢州度々武勇之譽有之、六十六歳而有伊勢田子柄病死。武田信玄公麾下刑部大輔嫡男向井伊賀守政重駿河國於用宗之城、天正十壬午年六十一歳而討死。伊賀守養子向井伊兵衛尉於同所討死同心遠藤飛弾、杉山作左エ門井家來之者落合三蔵、太持孫右エ門、渡辺寛角助、脇久藏、原庄右エ門討死。右之者共信玄公勝頼公御存知之者也、其外大勢討死、名不及記。武田勝頼公麾下、後徳川家康公麾下伊賀守嫡男向井兵庫頭政綱、勝頼公家康公兩御代數度之武勇譽有之、勝頼公御代走廻大方甲陽軍記有之、六十九歳而病死、秀忠公家光公二代麾下兵庫頭嫡男左近將監忠勝、大阪寅卯兩度之御陣、武勇譽有之、從秀忠公宛頼地相模國三浦郡之内廿六箇村、上総國望陀郡二箇村、周准郡大田和拜領之、將監嫡男右エ門佐忠政、同二男向井兵部少輔政勝、同三男向井弁之助政次、同四男向井八郎政興、同五男向井内藏之助重勝、同六男向井大学助政儀云云

とある、恐らく三崎志から写したものであろう。

以上三崎での遺跡を通して見れば政綱・忠勝・忠宗三代が三崎で活躍したことが知られるわけである。

政綱は先きに述べたように父政重と武田氏に仕えていたが武田氏没落後徳川氏に仕えた。家康は豊臣秀次から船三艘を贈られ、その中の一艘を政綱に預けた。この船は家康の好んで乗ったもので国一丸と呼ばれたものであった。天正十八年小田原の役には駿河の清水港から家康はこの船を利用して攻撃軍に加わり蒲原から上陸し陸路小田原に向った。政綱は駿河の船手仲間と国一丸で伊豆の西浦田子に赴いて山本信濃守の陣營を破り右の腕に負傷した。

この年家康が江戸に移り、政綱は相模・上総兩國の内にて二千石を頂戴し向井五左衛門政良・同権兵衛某・同権七郎某・渡辺五郎作某を部下とし同心五十人を預けられて御船奉行を命ぜられ三崎に来て政良らを走水に住わせ正綱の責任において両所で相模の海辺を守り江戸海防の第一線の防備に当った。これが向井氏と三浦半島の結びつきとなった動機となったものである。

忠勝は政綱の長子で向井将監として世に知られた船手頭で、慶長六年に相模国内に五百石を貰い国一丸と水主五十人が預けられた。その後徳川家の水軍として各地に転戦し功を樹て殊に大阪夏冬

二度の陣には傷を受けながらも奮戦し大功を立て元和三年二月十一日三浦郡内で二十六カ村・上総で四カ村合せて二千石の加増を受け、父の死後相続して父の采地も合せて五千石を知行し父の部下も合せて百人を支配するに至った。寛永二年七月二十七日采地の御朱印を下され相模国三浦・上総国望陀・同国周准三郡のうちで新墾の田を合せて六千石余となった^(註7)。

寛永八年十二月将監忠勝は秀忠の命によって伊豆で大船安宅（あたけ）丸の建造に着手しはじめた。竣工後はこの船を預かった。前年七年六月廿六日には水主同心百三十人となった^(註8)。

この船手頭の職は寛永九年に始めて置かれた職名で五人若しくは六人がその定員となっていた。幕府の用船を保管し、また毎年二人ずつ交替して四国・九州辺の浦々を巡視することが仕事で、若年寄の支配下に属し初めは役料が支給されていたが、後にこれが廃されて七百石高と定められた。そして属僚として頭一人につき四十人から八十余人の水主同心をもつていた。これらには二十俵二人扶持が給されていた。明良帯録に「武勇の人の勤場にして、水主同心を率ひて、海水働の差引をする。天地丸・麒麟丸・安宅丸等之船具を用ゆるは、古へ此場は大切の場なれども、今は左にあらざ」とある。

吏徴別録には「御船手 寛永九年壬申六月廿五日、始置四員、向井右エ門、小浜久太郎、間宮虎之助、小笠原安芸守」とあり、當中御日記にも「寛永九年六月廿五日 向井将監、同右エ門、小笠原安芸守、間宮虎之助 右御前江被召出御船之儀可申付旨被仰出之」とし小浜久太郎と向井将監が一方ずつに出ている。しかし、その後、時により人員の増減があったが向井氏だけは代々その職を世襲して禄高も二千四百石を受けて常に船手頭の首位に居った。

3. 逗子沼間の遺跡

沼間の曹洞宗長谷山海宝院の墓地に向井忠勝夫人の墓と向井大学助長保の墓とがある。前者には「長谷院殿久屋慶昌大姉」「当寺本願長谷川七左エ門少尉藤原長綱女」「向井左近将監忠勝後室右エ門佐直宗等数輩老母行年六十八歳」とあり、側面に「慶安五壬辰四月二十六日向井大学長保向井大膳長政」とある。この碑が忠勝の後妻を弔うものであることは明らかでその子長保・長政が建てたものである。

由来この海宝院は三浦半島初代代官長谷川七左エ門長綱の開基といわれ長綱の墓もある。忠勝の後室となったのがこの長綱の女であったので死後父長綱の側に葬られたものである。寛政譜には忠勝の妻は中田氏の女となっているがどうしたものかその後妻として迎えられたようになっている。五男正方の母は中田氏の女となっている。

兎に角、長谷川氏と向井氏の縁組みは三浦半島における最高権力者間に行なわれたもので注目すべきことであろう。この銘文中と寛政譜中に異名を発見する。それは直宗は忠宗、長政が正元とそれぞれ異なっている。

後者は忠勝の三男長保の墓である。「持岩英勝居士 延宝二年十一月四日」と刻まれ、墓背に「征夷大將軍家光公高弟後甲府君前丞相忠良公近習臣向井大学助長保 先老向井左近将監忠勝三男先妣長谷川長綱娘久屋慶昌大姉」とある。長保は鎌倉に住んでいたらしく寛政譜に「駿河大納言忠長卿に仕へ、忠長卿の封地を収めらるるのち鎌倉に閑居す」とある。

4. 大津の遺跡

大津の遺跡は臨濟宗竹林山貞昌寺にある。風土記によれば同寺は「古ハ吸古菴ト号シ開山ヲ南山

註 7. 寛政重修諸家譜

註 8. 同 右

士雲ト云フ。開基ハ石渡源左エ門ナリ。斯テ後寛文中ニ至リ庵主一翁ノ時、時ノ地頭向井將監正方其母貞昌院高雲素閑尼追福ノタメ堂宇ヲ再建シテ一寺トナシ、先妣ノ法号ニヨリ今ノ寺号ニ改ム。正方ヲ中興開基ト称セリ。寺地旧クハ小名竹沢ニアリシヲ安永三年六月寺主天洲、地頭向井將監政香ニ請今ノ所ニ移ルト云フ」とある。結局この寺は向井正方がその母中田氏の女貞昌院の追福のため堂宇を建立して貞昌寺と呼称したものであろう。また、寺に残る縁起すなわち弘化三年三月廿四日に行年八十四の戒珠菴慧光が古いのを謹写した「相模国三浦郡大津邑竹林山貞昌禪寺略縁起和解抄」に本尊の將軍地藏尊に就いて

抑奉安置於当寺本尊延命地藏願王菩薩者往昔運慶大徳之正作而靈驗新成尊像也(中略) 建久年中右大将源頼朝公皈敬之守護仏而靈威全相備靈仏也是斯秘仏之小像而御長一寸二分今奉拜礼尊像之御腹籠也

(中略) 向井左近將監忠勝卿此尊像有信敬而代々之領主令恭礼也厥后向井將監正方之母公寛文中中逝去法号貞昌院殿高雲素閑大姉之被建廟所其節引(加藍於此境而改吸江菴号貞昌寺是也(下略)

このように記されている。

ところでこの貞昌院の墓は本堂の左、数段登ったところにある。二段の台石の上の蓮座に座した法相石像で胸部に「貞昌院殿高雲素閑大姉 覺靈」と二行に書かれその右に「寛文三癸卯歳」左に「九月廿四日」と歿年を割っている。背面には「此所領主従六位下向井兵部少輔源正方母六十二歳卒」と彫してある。

この墓の左側に小さな墓があり、正面に「靈照院本覚知心大姉 逸樵院寒松独秀居士」と二行あり右側に「天和元酉年八月十二日」と靈照院の没年を、左側には「天和元酉年十二月六日」と逸樵院の没年をそれぞれ刻してある。これは同寺の過去帳に拠れば向井内記とその母の墓であることがわかる。

貞昌寺の裏一つ谷を越した山頂俗に御廟所山という所に正方夫妻の大きな墓碑が二基ある。向って右が正方の墓で、正面に「大通院義山浄節居士 俗名向井氏將監源正方 相州三浦数ヶ所領主」と見え、右側面には「向井氏左近將監源忠勝五男」とあり、左側面には「延宝二^{甲寅}歳七月十日」とその没年を刻している。なお、この墓の笠裏に銘文があるが風雨の浸蝕で判読に苦しむが次のようである。

恭以向井氏將監源 _____
 將軍源家光公 _____
 簡所威風振四海有 _____ 如海 _____
 婦郷三宝而建寺破僧莫右 _____
 不可勝記矣惟時寛文 _____
 己酉春不意誤次男 _____ 前左近衛 _____
 令 _____ 愁怨転深拾 _____ 忠勝五男 _____
 此觀生死無常 _____ 氏將監 _____
 日尚矣一日就 _____ 此所数 _____
 余需法講道号 _____ 領主也 _____
 剝造營石塔預令 _____ 延宝三年三月 _____
 記之遺命既寿了將 _____
 葬這塔下嗚呼生前功德記後名邑也故 _____
 不得辞字之謂 _____
 諱之称浄節居士院号 _____ 大通以刻于石 _____
 誠 _____ 功德之標識 _____

也矣百千年後之人必

所藏者也尔云

寛文 酉 歲十二月十四 奠武江陽岳住

持大室応干需書 印

この笠の高さは三尺三寸六分，塔身は四尺二寸五分，台は三座で三尺四寸という大きなものであり，西北に向いている。

その左に正方の妻服部玄蕃頭政久の女^(註9)の墓がある。この墓も正方の墓と同型で笠が三尺三寸五分，塔身が三尺八寸五分台座は矢張り三座で三尺四寸五分である。正面に「靈徳院心鑑自照大姉服部氏従五位下玄蕃頭源冬次息女 向井氏將監源正方内室同式部少輔正盛母」とあり，左側面にその没年「寛文拾庚戌歳九月十四日逝去」とある。また，この墓の笠裏にも次のように刻されている。父は政久か冬次か。

夫観人間之不定世如夢幻似霜露易醒又易消生死無常之連誰
保百歳之寿矣爰服部氏従五位下玄蕃頭源冬次公息女者向井
氏將監源正方公之内室而同式部少輔正盛公之慈母也今茲寛文十
上章閣茂之夏不省罹陰陽之患尔称当世良医醫之妙術暮秋
十有四奠一主四十一
呼無一家盡不
驚嘆者况是
正方正盛之愁吞
気吞声之悲不言
而可知而已既随遺
命葬正方公果代之領所相州三浦郡大津山頭重刻千石安置
墳上縦雖經萬世天頽地頽而他人知造所於造發愛憐莫
易地移塔是二公之所願也云尔
武江前田鳴陽岳住持沙門花園末葉昌大室叟応干需記之
干時寛文庚戌十春十四奠

さて，正方は忠勝の五男となっているが前記の忠勝の碑にはなく同碑には五男は内蔵之助重勝と記されている。同一の人であるとも考えられない。正方は初めは忠綱といったり兵部または将監を称していた^(註10)。恐らく母が異なるゆえではなからうか。

少年時代から父忠勝にしたがって御船に乗組みその教育を受けていたものと思われる。既に寛永十五年に粟米三百俵賜っているが同十八年十二月四日に父忠勝の遺跡の中三浦郡の内の千石を受け，兄忠宗の部下水主三十人を預けられて御船奉行の地位についた。彼の根拠地は走水であつたのであろう。兄忠宗が三崎におつたからである。由来走水の御船手頭は忠勝の弟正通が走水の御船奉行をつとめておつたものであるがその後が判然とせず恐らく走水御船奉行を正方がつとめたものと考えられる。正保元年七月六日にさきに死んだ兄忠宗の水主五十人も預けられ三崎の守備を担当するようになり両所の警備を受けもつたものであろう。慶安三年九月十九日父忠勝の建造した安宅丸の修理を命ぜられ，これを成し遂げた。造船術にも知識技能の持主であつたと思われる。寛文二年六月十一日更に三浦郡のうちから千石の加増があり二千石を知行するようになった。そして吏徴附録に「向井將監 御船手寛文二年壬寅六月十一日 向井兵部事，御座之間被為召之，安宅丸，天地丸，龍王丸右三艘御預被成，其上千石御加増被下之，同心都合百人被成之旨，御直 = 被仰付」とあるよ

註 9. 寛政重修諸家譜

註 10. 同 右

うに千石加増され、同時に渡辺五郎作某や推木三左エ門某を支配し水主五十人を増され百人が預けられたのである。走水の渡辺姓はこの配下渡辺五郎作某と関係があるものと考えられる。彼の知行地大津に葬られたのは当然で没年は墓碑にある通り延宝二年の七月十日で時に五十五才であつた。

5. 走水の遺跡

走水も江戸防備の拠点とされ政綱以来三崎と共に向井氏によって守備されていた。忠勝の弟正通が走水の御船奉行をつとめ正方もこれをつとめたことは明らかである。ところで向井氏の遺跡を走水の地に尋ねれば同地の浄土宗本水山覚栄寺にある。それは政綱の兄で政重と共に天正七年九月十九日駿河国用宗の城で戦死した伊兵エ政勝の子孫の遺跡で政綱・忠勝・正方らの系統ではない。

伊兵エ政勝の墓か「南無阿弥陀仏 浄屋安進 霊位」とあり「俗名向井伊兵エ」と刻まれ施主は向井十左エ門となっている。没年と思われる正保四丁亥年九月廿九日もあるが若し伊兵エの墓とすれば没年は天正七年九月十九日^(註11)でなければならない。他に正保四年の没年の人はないようだ。

他に二群ある。一群は四基ばかり。その中に一きわ眼立った花崗岩の高さ八尺七寸幅二尺五寸という立派な逆修の碑がある。厚さ七寸五分であるが風雨の浸蝕で文字が判然としないが念譽崇寿信士の法名と干時寛永九年五月五日など見える。この年は向井五左エ門政良である。ところがこの碑の側に一基の宝篋印塔があり台石の正面に「為有志者心譽崇珀信士仏果也」と三行に書かれ右側面には「其仏本願力闍名欲往生皆□利彼國□致不退轉」を四行に、左側面に「寛永九年五月五日 施主 三浦走水 向井五左エ門」とこれも四行に記されている。この二基とも寛永九年五月五日の年記があるのでその関係を判然としたいが未だ解明できないのである。この一群中に高さ二尺六寸八分の一石の五輪塔がある。これには「元和五年十月廿六日 為天誉浄真禪定門」とあるが何人なるやこれも判明しないのである。また、その側にある宝篋印塔も文字不明である。

他の一群は三基のもので、その中の宝篋印塔は二メートル以上のもので柱身には「南無阿弥陀仏」とあり、その下の正面には「性譽雄胤信士」としその両側に没年月を「寛永二十一年」「九月十六日」としてある。右側面には「向井権十郎政勝」と見える。この権十郎政勝が俗名かまたは施主であるかわからないが俗名とすれば政勝は伊兵エと呼び父正重と共に天正七年九月十九日用宗で戦死している。権十郎を名乗ったのを寛政譜に拠れば政勝の子の政盛と政勝の孫政直の二人を挙げることができが政盛は慶長四年四月に没し政直は正保元年に没しているのである。

この群中に二メートルに近い高さの大きな地藏尊の浮彫の碑があり、地藏尊像の右には「為真窓性空居士菩提也 施主」とあり左には「萬治三天□二月十四日 敬白」とある。これは政直の子であり正友の父である半十郎某の菩提を弔つたものであることは判然としている。なお、その側に石灯笼がありその柱の正面の中央に「為三界萬靈六道四主□□□也」その右に「萬治三年子 施主」左に「二月十四日 敬白」とある。この年紀は前者と同様半十郎某の没年に一致している。そして裏面には「向井半七郎」とあるので半七郎（または菊十郎ともいう）がこれを建てたものであることがわかる。

しかし、この系統は半七郎が寛保二年三月二十九日出奔して絶えたものである^(註12)。

以上主として三浦半島の四カ所に残る墓碑を通しての紹介で終り向井一族の研究は後日に譲りたいのである。

註 11. 寛政重修諸家譜

註 12. 同 右